

◆海員随想 続ボーイ長（見習い）賛助組合員③ 今井 武

【引揚船の救助曳航に命を預けて】

ラジオ放送がこの海難を伝えていた。荷役不能となって窮余の策で、作業班は早々に小樽へ引き揚げ、SOS 発信の翌日、疲労した本船は救助のため引揚船・新潟丸の曳航で小樽へ。さらに小樽から同じ引揚船・第15長運丸によって函館ドックへ入渠、むこう4カ月の重傷だ。

小樽で揚げた積みかけの木材は、阪神定航の氷川丸に転載した。本船はこれを契機に、母港は九州から北海道へ移り、時のボーイ長は18歳に成長してセーラー仲間と毎夜の“かたふり”には一端の末席にあった。一見習いといっても、ボーイ長も男の子、自然と誘惑と“強引”にかられて、その道を行く、いわば“発達”期にあった。

酒の味は知らなくもなかったが、しばらく自重した。タバコは時節柄、配給制の中で港々にある海員財団（船員消費センター的）へ当番の先輩の尻に伴って、酒、タバコ、その他の配給物資を担ぎ帰船。ボーイ長は常に時間外以外は上陸許可がなく、今日のこのお天道さまが照る中での上陸で、陸の香りいっぱいがうれしかった。

右の配給制の事情から、タバコにめぐりあう年齢に達したなら喫煙をと思う。その間に配給制度が撤廃で、その後タバコとの縁はない。当時ムード歌謡で、歌手・菊池章子が絶唱の「星の流れに」が流行った。いまりバイバルのカラオケで、この歌を私が絶唱。時の流れとともに、誰誘うともなく、時代的憩いの場としていかがわしい映画館や劇場へ足を運び、街の辻々ではパンパンガールに袖引かれ、さらに昇格して女郎屋、遊郭のオフリミット地帯へ体を縮めて侵入する次第となった。

正月が来た。賄部をはじめボーイ長も多忙。テーブル一杯にご馳走が並ぶ。「明けましておめでとう！」ボースンの発声で乾杯。そしてボースンの手から、恒例により甲板部一同の祝儀がボーイ長へ。私は皆さんに一礼。男所帯のパーティーながら、みんな笑顔でうれしい一日。飲む酒、そして論題もいつもと違って和やか。

当時、正月の餅つきは船内で行われ、面白半分で杵持つ腕を競い合った。飲食店の女将さんが餅つき加勢に訪船したこともあってにぎやかだった。正月は毎年乗船中のことが多く、また航海中のこともあった。

先の実験事故のドックが終わると、室蘭から川崎を一航海後、再び道材積みの配船で、今航はオホーツク海のサロマ湖沖でアンカー、作業班は地元で待機していた。湖内から筏で材が出る。時々時化のため網走港へ避難を繰り返して満船。長尺で大木のデッキ積みで、ボーイ長の飯運びは慣れない足元が危険な毎日で、大阪港で揚げ荷終了。

室蘭は飲んでも遊んでも楽しい港だった。

朝鮮戦争が勃発したある日、千歳市の米軍基地から多くの出兵で、本港へ輸送船を主とした艦隊が入港。艦船の兵隊たちの上陸には多様な規律はあるだろうが、この兵士たちは上陸すると一気

に発散して尋常な行動ではなかった。そのうえ、われわれのオアシスとする色街、幕西・浜町界限の女群を買い占めてしまった。

この港でボーイ長は 20 歳を迎えた。正月、海員組合支部からの呼び掛けで、市役所の成人式に本船の該当者、私一人が出席。この日は国が布告した初めての「成人の日」であった。右も左も知らぬ集団に加わり、各名士の祝辞と市長の乾杯の音頭で 20 歳を祝った。ところが、その翌年、下船中の正月、町役場からふるさとの成人式への招待があり、同級生たちとそろって出席。今もって、この成人式の一線の暦は市町村によって異なる。

「海員だより」